

第四節 土木と災害

上勝町が位置する勝浦川上流は、地質的には秩父帯古生界に属し、山稜高度が高く、山稜はすどく、屈曲に富んでいる。河川の開析谷、水系は最も深く、よく分枝しており、山腹斜面は勾配最大で、起状量はもつとも大きい。勝浦川とその支流が深い峡谷を形成しているため、梅雨前線や台風などにもたらされる集中豪雨（福原旭は県内最多雨地の一つで年降水量は、三、四三四ミリメートルに達する）によって、毎年のように、土砂崩れ、地すべりなどの災害をこおむってきた。

1 上勝町内の河川

第一編第一章上勝町の自然的基礎の第三節地形で述べたように、上勝町内の水系は、秩父帯古生界の特徴を示し、那賀川中上流域と同じく、開析が進み、最も深く、しかもよく分枝している。表に示したように、勝浦川は第五次水流で、その支流旭川や殿河内谷川は第四次水流となる。杉地谷川、北谷川、榎原川、梅木谷川、藤川谷川、竜谷川、府殿谷川は第三次水流となり、瀬谷川（八重地）、呼谷川などは第二次水流となる。

町内の河川でとくに集落が多く立地するものは、上流から、北谷川（八重地）、市宇谷川（市宇）、榎原谷川（榎原）、旭川（田野々）、野尻谷川（野尻）、府殿谷川（瀬津）、傍示谷川、藤川谷川などである。

一方、県の指定している地すべり防止指定区域は、杉山、柳谷、蔭行、日浦、喰田、大北、生実、八重地、市宇、戸越の一〇か所である。

2 災害の歴史

近世以来の主要な災害を表1に示した。とくに、元禄一四年（一七〇二）の山犬嶽崩壊、天明四年（一七八四）の大飢饉、天保九年（一八三八）、同

表2 上勝町の災害の歴史

年月日	西歴	災害の種別	被害の概要
天正年間	1573~1592	火災	〔田野々〕黒松寺法地以前、第二代梵栄時代において大火全焼。
延宝1年	1673 癸丑	洪水	〔勝浦郡志〕9月13日、勝浦川大水、坂本の長福寺前から与川内村まで川成。
天和1年	1689 辛酉	台風、崩壊	〔旭〕古川宮の尾が台風のため崩壊し、普門寺および耕地等に大被害を受く現在の願成寺および王子神社を現地に移転したとの伝説あり。
元禄2年	1689 己巳	洪水	〔阿波志〕8月、勝浦川氾濫、大洪水あり。
元禄3年9月	1690 庚午	洪水	田畑流失したとの伝説あり。
元禄5年頁	1692 壬申	洪水	勝浦川は砂川と化し、低地の田畑山林流失したとの伝説あり。
元禄14年 8月17・18日	1701 辛巳	山犬嶽崩壊 洪水	〔勝浦郡志〕「寛文年間野尻日浦の観音堂前に宝積院といふのがあった。其先達行清は瀬津の山犬嶽で雨乞をしたのに雨が降らなだったので牛肥を持って山を織して祈ったら俄かに一天かき曇って瀬津の山岳八町崩れた。そこで所の住民は大いに驚き榎原村に逃げ来て住み付いた。これより榎原分に瀬津榎原の一名が起ってから今に至るも住民は其地の氏神に属しているという」 〔瀬津〕洪水のため瀬津の下々の田畑は埋り、水は土砂とともに流れ、立木も一時に流れ、一門屋で川をせき止めたために、瀬津の瀬にあった家は浮き、戸越山の神の森まで上ったといわれる。また府殿平から細根下の住民は家財をすてて榎原に逃げた。また水は傍示の大大尾に流れるかも知れないと住民は心配したといわれる。 〔田野々〕8月17・18日の両日、大雨のため勝浦川が氾濫。とくに旭川の被害甚大であった。このため中須、神田の影、平間方面大災害を蒙る。 〔徳島年表〕御両国大雨洪水。
元禄15年	1702 壬申	洪水	7月27・28日の両日大雨あり。水害を蒙っているうえに、次の8月27、28、29日の3日間にあたり、豪雨やまず。ために、旭川氾濫し、栗平方面、宮床（栗平の中の神明神社神域）、影日浦の地域、ことごとく決潰し流失し、川原の様になった所もある。
安永6年	1777 丁酉	飢饉	〔勝浦郡八重地村飢伴借米奉願上指出版〕によれば、飢饉により、八重地村45戸のうち飢家が20戸に達していた。
天明1年	1781 辛丑	洪水	〔勝浦郡志〕勝浦川筋出水（宮井川筋崖一円崩壊）
天明3年	1783 癸卯	飢饉	〔蜂須賀家記〕「天明三年九月命を下して痛く奢侈を禁ず、又命じて勝浦、那賀、海部、美馬、三好諸郡の貧民にめぐみ貸すこと二万三百八十余人、八か年凶作相続き封内飢饉公庫虚乏以て賑救するなし」
天明4年	1784 甲辰	飢饉	天明3～6年（1786）にかけて全国的な大飢饉のため農村荒廃が進んだ。勝浦山分においても、天明年間打続凶作に村民は困窮の極に追い込まれていた。〔美馬家文書〕によれば瀬津村のうち榎原傍示は冷害を受けた上に、殿河内御林に続いているので、猪・鹿・猿等に「田畠立毛種物等悉く喰荒され、年貢上納が困難になり、また、8月中旬より初霜が下り、9月に初雪をみ、田畠一円に成実が悪く、葛根も堀りつくすほどの飢饉が続いた。
寛政1年	1789 己酉	地震	4月16日夜九ツ時大地震、〔黒松寺二世祖梁聖和の直筆〕「山々谷々崩レ、川水三日ノ間濁リ流レ、多クノ川ヲチ、ドテ、田地一円ニワレ、水一日ガ間、土路水吹き出シ、又カワラフキイエ、クラト

表1 上勝町内河川一覧

河川名	区 域	延長 m
勝浦川	勝浦郡上勝町大字生実字殿内 以下 海に至る	49,636
旭川	大字旭字日浦峯78の1 清風橋から勝浦川合流まで	8,000
榎原谷川	大字旭字志田倉8番地先 志田合橋から旭川合流まで	1,250
杉地谷川	大字福原字杉地54番地先 川上橋から勝浦川合流まで	3,300
傍示谷川	大字傍示字第1番地の1 本谷橋から勝浦川合流まで	2,500
藤川谷川	大字正木字西岡85番地 枇杷の久保橋から勝浦川合流まで	2,300
呼谷川	大字傍示字小松266 大字傍示堂久保23 傍示川合流点まで	1,200
野尻谷川	大字生実字上野91-1 右 石 大字生実字影41-1 旭川	900
龍谷川	大字旭字葛又168 右 大字旭字黒北瀬18-1 旭川	600
北谷川	大字旭字石70-2 右 大字旭字古屋敷28 旭川	1,500
府殿谷川	大字生実字丸山41 右 大字旭鷹飼野4 勝浦川	1,200

五四）には台風が相続き、九月の福原旭の降水量は一、五五五ミリで、月降水量の記録をつくった。また水稲も昭和二〇年（一九四五）につく大凶作であった。昭和三十六年（一九六一）の第二室戸台風と一〇月の大雨は大きな災害をもたらした。さらに、昭和五〇年（一九七五）、五一年（一九七六）の一七号台風は大洪水を引きおこし、各所に地すべり、崩壊が発生した。

一四年（一八四三）の大洪水・大飢饉、安政一四年（一八五四）の大洪水・大地震、四一五七）の大洪水・大地震、慶応二年（一八六六）の「寅の大水」などが藩政時代の大災害であった。

明治にはいり、二五年（一八九二）の台風による大洪水、大地すべりが大災害をもたらした。とくに葛又山の崩壊は旭川の流路をかえるほどであった。また、明治三二年（一八九九）の大洪水は、大凶作をもたらした。ついで、昭和一三年（一九三八）の台風による大洪水がある。

戦後では、昭和二五年（一九五〇）のキジア台風による洪水があり、被災総額は四、二〇〇万円に達した。同二九年（一九五五）のキジア台風による洪水

明治25年	1892 壬辰	暴風雨、大洪水、地すべり	残す。 〔徳島県災異誌〕7月23日朝、高知市付近に上陸して山陰に抜けた台風により本県は暴風雨洪水高潮の大災害に見舞われ、その上山岳の崩壊も数知れず、近代における災害のレコードを作った。被害、死者311人、全壊2,635戸、流失644戸、半壊2,559戸、堤防決壊57キロ、破潰136キロ、山岳崩壊367万坪、浸水反別26.452町。 〔田野々〕7月23日、連日の豪雨のため旭川氾濫し、かつまた葛又山大崩壊のため、葛又部落全滅した(栗岡家戸主龍太外6名、立石家町蔵その母、葛又家武蔵外3名)。 大崩壊狂流し、橋本において激突攪乱された結果、突如としてその界限は狂乱し怒濤の大渦となり、旭小学校流失、栗岡佐藤次夫婦、栗岡伝十郎等は奔流に流されたが九死に一生を得た。河道を変え、水勢は南方中須山麓の方へ狂奔し、一瞬にしてこの所に居住していた山部家は土蔵を残し、本宅・納屋が流失。戸主栄蔵外7名の家族の者は奇蹟的に救出された。旭川の流路はこの一夜にしてはるか南方へ曲り変ってしまった。 〔瀬津〕7月23日、川の水の高さ一丈余尺、午後8時府殿ごぼご山塩湧出して下々の谷筋田畑10余町程流失し、また埋り甚だ広大なる損失を受けた。 〔高畑〕23日、高畑名字花の太尾のウネより北浦屋敷へ見通し畑1枚毎に2〜4寸ずつ割れた。また北浦宅にては破幅8寸深さ一丈余程同宅より高木野うばへ地割れ通し、さらに井地か谷に至るまで割れた。井地か谷、とどろふたの田畑ついでいたみ、宇石本榎平の田うまり、地割が動いたため小便坪の水底がひびわれた。 〔野尻〕23日夜、宇下野尻片山の尾より松の平の間にいたる地割れ下がり、宅地田畑枚毎破れ動き、段々に高低となり、水止まる田一枚もなく、家の地盤が傾いた。 〔府殿大火〕民家7戸、観音堂・神社舞台焼失。瀬津は各戸へ白米2升、むしろ1枚、番繩1番、萱一荷を割当てる。 〔旭〕9月18日、黒松寺炊事場より出火し、本堂その他の付属建物全焼。
明治27年	1894 甲午	旱魃、洪水	〔瀬津〕6月21日、高山にて大火。6月22・23日、7月3〜5日、清水山火災。7月8日、山伏獄行者の丸にて火災。雨乞のため戸別8人宛出役。7月24日雨あり、大川水8尺出る。田植できなかった乾田に苗を植付け。
明治32年	1899 己亥	大洪水、大凶作	〔徳島県災異誌〕5月13日、ひょう(木頭村)、6月8日、台風。7月8日、台風(洪水)。8月28日、台風。9月8日、台風。9月下旬、秋霜。相つぐ台風の襲来と非常低温と日照不足のため大凶作となり、反収はわずか8斗9升(半年作の75%)であった。 〔瀬津〕9月6日より雨もようおこり、7日はふつう雨、川水3尺増。全日夜半より風を加え、大雨が8日朝まで続き、さらに増水7尺、9時過より北風激しく、雨条を乱すごとく11時頃川水増し、鳴流して川岸の山野田畑崩れ、架橋を落し、人家を倒す。その有様筆舌に尽しがたし。瀬津名において明治23年架設した榎瀬橋、大北橋(高さ1丈7〜8尺より2丈の高橋)流失。大北にて田地3〜4反歩流失。谷口下浦にて2反歩、瀬津の瀬にて川西岸3反、東岸1反荒川原となる。落合の出合橋両岸流失。 〔福原〕古川にて人家3・4戸、古川橋、中津田地ごとごとく流失。 〔前原修堤碑〕勝浦川堤防破堤90余間。田地流失50余町。

			モ多ク乱ルノ事教知レズ神前石ノ鳥居ヲ乱シ、寺々ラン塔ハ申ニ不及、先アラマシノ分、記シヲキ候」
享和3年	1803 癸亥	凶作	〔美馬家文書〕瀬津村、田作昌作とも申うれ、青実まさりになる。
天保9年	1838 戊戌	大洪水、飢饉	天保5〜8年(1834〜37)に全国的には天保の大飢饉がピークに達するが、阿波国では天保7〜8年(1836〜37)に飢饉が極限状態に達していた。 田野々・八重地では大風雨のため農作物に大被害があり、収穫皆無の土地もあったといわれる。
天保14年	1843 癸卯	大洪水、飢饉	〔勝浦郡志〕7月7日の大洪水は世に「七夕水」とよばれ勝浦川が大氾濫した。下流の沼江、中角、今山はもちろん、宮井では井関がつぶれ本庄では丈六寺山門の下手の土手が破堤し、大災害を受けた。
嘉永2年	1849 己酉	大洪水	〔勝浦郡志〕「阿房水」とよばれた大水で田浦村で堤が切れ、田浦・前原両村の田畠が土砂で埋まった。
安政1年	1854 甲寅	大地震	11月5日・6日両日、東海・東山・南海各道大地震、大津波に襲われる。この地震のため田野々刈揃山北側の山辺りに東西に向って延々と一大亀裂を生じたので田野々部落民は一大驚倒した。一字さこ大石、ひのさこ石こける。
安政2年	1855 乙卯	大地震	8月、刈揃山大崩壊する。前年の大地震のため刈揃山北側に大亀裂が生じたが、大雨の浸透により大崩壊をきたし、現在のような蛇紋岩の赤裸々な山肌を露呈した。この大崩壊の轟音は遠く櫻原村まで聞えたといわれる。
安政3年	1855 丙辰	大洪水	〔勝浦郡志〕8月1日の大洪水勝浦川沿岸の被害は多大であった。
安政4年	1857 丁巳	大洪水	〔旭文書〕7月1日の大洪水により、勝浦川上流の各村は大きな被害を受けた。田野々村では、居宅・納屋全潰8、半潰30、稲の被害3割、山畠5割、立木の被害2割であった。
文久1年	1861 辛酉	飢饉	〔勝浦郡田野々村飢人面付差出張〕によれば、田野々村の御蔵百姓16戸・57人が「飢人」とされている。
慶応2年	1866 丙寅	大洪水	〔勝浦郡誌〕8月1日から雨降り続いて、8日の夜には暴風豪雨となって勝浦川暴漲してから沿岸50余ヶ処の大破堤を来した。7月夕には阿波国内のすべての河川が大氾濫した。この大水を「寅の大水」とよんでいる。宮井村では野上の堤防が約140〜150間切れ、飯谷村では長柱名西分の山腹が崩壊し、家屋が流出・死者が出た。 〔旭文書〕によれば「寅の大水」により、田野々村の用水溝167か所の全部が被害を受け、142か所については百姓が自力で復旧したが、33か所は大破し、自力復旧は無理であるから、藩の勘方で修復してくれるように願出ている。
明治17年	1884 甲申	暴風雨	8月25日暁、瀬津名氏神社屋根とび、山伏獄大師堂こけいたむ。瀬津名大師堂に出役3人宛、番繩一束、萱一荷、白米2升、1戸80銭宛をとせい山木売払い積金を以てす。神社出役2人宛、もち白米5合。
明治19年	1886 丙戌	大干魃、暴風雨	6月17日より8月11日まで、47日間時雨9日。各用水水なく、植付した田も白穂。畑作も不作。 9月10日、大雨により川窪家つぶれ、府殿3戸屋根いたみ、野尻1戸つぶれる。
明治21年	1888 戊子	火災	10月11日夜、焚火の不仕末により田野々神明神社舞台焼失する。そのため拝殿前の老桜樹、舞台東側の老杉樹に多大な焼痕を今なお

			2200メートル、村道被害96か所1000メートル、流失橋梁9か所、被害総額 4,200万円
昭和26年	1951 辛卯	台風	〔徳島県災異誌〕 8月19～22日、マーシ台風。16～22日の7日間の福原旭の雨量 606ミリ。10月14～15日、ルース台風。 〔上勝町〕 流失1戸、道路被害2か所25メートル、被害総額 1,145万円。
昭和29年	1954 甲午	台風、大凶作	〔徳島県災異誌〕 5～7月にかけて低温、大雨。8月18日、5号グレイス台風。9月7日、13号キャシイ台風。9月13日、12号ジェーン台風（福原旭雨量 293ミリ）。9月26、洞爺丸台風。9月の雨量は福原旭で1,555ミリ、月雨量のレコードを作る。本年の水稲反収は1石3斗9升で平年作の71%、昭和20年以来の大凶作。
昭和31年	1956 丙申	台風、火災	〔徳島県災異誌〕 9月10日、12号台風。7～10日の福原旭雨量 658ミリ。 〔上勝町〕 流失1戸、道路被害1か所、被害総額 130万円。 〔旭〕 12月29日白昼、黒松寺本堂その他の付属建物全焼する。天正年間から3回目の火災であった。
昭和36年	1961 辛丑	豪雨、台風	〔徳島県災異誌〕 6月末梅雨前線集中豪雨。24～29日の6日間の福原旭雨量 731ミリ（26日の雨量 340ミリ）。 9月16日、第二室戸台風（高潮）。14～16日、3日間の福原旭雨量 763ミリ。 10月26～27日、低気圧型大雨。2日間の福原旭雨量 593ミリ、第二室戸台風による災害復旧のないあと、より一層大きな被害を出した。
昭和43年	1968	雪害	2月15日、大雪のため山林に大被害あり。造林地の倒木。
昭和50年	1975 乙卯	台風、洪水地すべり	〔旭〕 8月22、台風襲来。榎原谷氾濫する。大雨の中、志太倉山大崩壊し、膨大な量の土砂、倒木などが榎原谷に流入したため、その下流氾濫し、堂平部落の寺西、豊田、平岡、森、松岡各家とその周辺の田畑へ土砂流入推積し大被害を蒙る。同箇所の復旧延長 213メートル、復旧費 2,294万円。

注 〔上勝町〕の被害は「上勝町建設計画書」昭和34年による。



堂平災害（1975年8月23日午前8時）

			〔中角村〕土手350間切れ、人家畑被害甚大。 〔芝生村〕土手切れ小松島に直流。人家畑被害甚大。
明治42年	1909 己酉	洪水	〔旭〕旭川洪水のため神田大橋流失す。
大正4年	1915 乙卯	台風、凶作	〔徳島県災異誌〕 9月8日、台風。水稲の開花期にあたっていたため大被害を受け、反収は1石1斗1升・平年作の66%で、明治32年以来の最低記録となった。 〔瀬津〕東風雨はげしく水8尺増、稲全部白穂となり、50年来の大風害、村中免租願を出したところ、税務署官吏調査の上免租をうける。
大正10年	1921 辛酉	台風（長雨）	〔徳島県災異誌〕 6月、梅雨。麦不作。異常低温・日照時間不足。9月、台風・長雨・日照時間不足。 〔旭〕 7月13日、神田大橋旭川大洪水により流失。
昭和13年	1938	台風、大洪水	〔徳島県災異誌〕 9月4・5日の両日間に福原で780ミリに達し、3～5日の3日間の雨量は808ミリにおよぶ。集中豪雨のため、勝浦川、鮎喰川は未曾有の大氾濫となった。台風は牟岐付近に上陸。雲早山の東を北上し、瀬戸内海にぬけた。 〔旭〕 9月5日、旭川大洪水のため木造寺ノ地橋流失（同橋は上中村部落から旧神明部落へ渡ったり、神明神社参道として明治時代から重要な橋であった）。 〔生実〕川北にあった村役場下山山内旅館、川向井上流失。松田、吉積等地盤被害、落合橋に水がのる。
昭和16年	1941 辛巳	台風	〔徳島県災異誌〕 8月15日、台風。12～14日の3日間の雨量福原旭 404ミリ。10月1日、台風。9月28日～10月1日までの雨量雲早山中心に500ミリ以上。 〔旭〕神田大橋台風により吊線切断。木造部分流出する。
昭和17年	1942 壬午	大火	〔旭〕11月5日、神田部落未曾有の大火。部落東方より出火し、折からの風におおられ火勢西に流れ、民家に類焼し、5戸11棟を全焼した。
昭和18年	1943 癸未	火災、多雨	〔旭〕2月17日、神田部落の東部より出火し、火勢東へ流れ、民家へ類焼し、家屋7棟を全焼した。 〔徳島県災異誌〕 7月下旬連日降雨・福原旭1109ミリ。
昭和20年	1945 乙酉	台風、凶作	〔徳島県災異誌〕 9月17日、枕崎台風。10月10日、阿久根台風。戦前戦後を通じて空前の大凶作、本県の水稲反収8斗6升は平年作の47%。
昭和21年	1946 丙戌	南海大地震	〔徳島県災異誌〕 12月21日、南海道大地震。
昭和24年	1949 己丑	台風	〔徳島県災異誌〕 6月21日、テラ台風。福原旭雨量 272ミリ。8月16～18日、ジュディ台風。福原旭雨量 446ミリ。 〔上勝町〕 流失2戸、田被害 1.3町、畑被害 0.5町、道路被害4か所45メートル流失橋梁1か所、被害総額 170万円。
昭和25年	1950 庚寅	台風	〔徳島県災異誌〕 9月3日、ジェーン台風。9月2日、福原旭の雨量 382ミリ。鮎喰川・那賀川・桑野川大氾濫。勝浦郡の被害、死者5・不明1・全潰76半潰596・流失40。 9月13日、キシア台風。13日の福原旭の雨量 339ミリ。9月の雨量福原旭1415ミリ。水稲平年作の93%（1石7斗2升）。 〔旭〕 8月、神田部落を貫流する岩屋坂谷川氾濫する。東部義治所有の納屋、牛1頭流されるが牛は助かる。 〔上勝町〕 流失10戸、田被害50町、畑被害20町、道路被害 220か所